

# アイヌ民族の衣生活について (第五報)

荒 井 純 子

## 序 言

紀要第四集および第五集において、アイヌ民族の古くから着用していた厚司（アツシ）が、彼等独特の直感と技術によって採取された植物質の繊維から如何なる方法で織物に作られたか、織機およびその操作技術について詳述した。今回はその織物より如何なる方法で着衣が構成されたか、彼等の着用していた各種衣服の形態より考察し、記してみたいと思う。

調査の方法は前回同様四つの方法で調査したが、第二集で記したごとく彼等の衣服は、副装品と共に埋葬されることが多くまた植物質のものは繊弱である上に着流しにすることが多いため、調査に困難をきたしたが多くの方々の御協力により多数の土俗品にふれることが出来た。

- 一 アイヌに関する学識者に御意見を伺う
- 二 古文献による調査
- 三 現在ある土俗品中より衣類を調査する
- 四 現存する古老（北海道内）を訪ねて往事の事情を聴取（1957, 1959, 1961年夫々8月調査）

## 本 論

彼等民族特有の織機によって織られた厚司よりなる衣服が如何なる方法で着衣に構成されているかということは特に興味深いものである。一見「むしろ」のごとくに見える織物が彼等の自製した

最古の貴重な衣服であるということは前にも述べているが、その後交易によって得た木綿衣の衣服と共に、内地の羽織を着物に仕上げたような、体に比べて身丈の短い絆纏用のものに構成されている。その仕立方も、厚司、いくらき厚司、木綿衣とも凡そ同一形式のものである。内地の着物とその形態を比較すると図1のようになる。すなわち彼等の衣服は前身ごろも、後身ごろも、一幅からなっていて、肩で前後

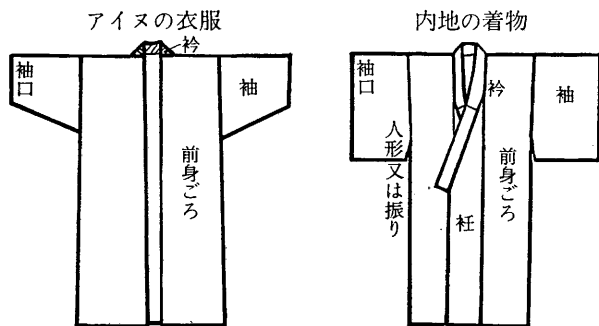


図1 衣服の形態

に折りまげられ、頸のところで両肩に切り込みが入り衿がつけられている。両端の袖は筒袖で袖下がすぐ脇縫になっている。つまり内地の着物の衤も衿もなく、袖には振りも身八ッ口もないのである。

衣服各部の名称

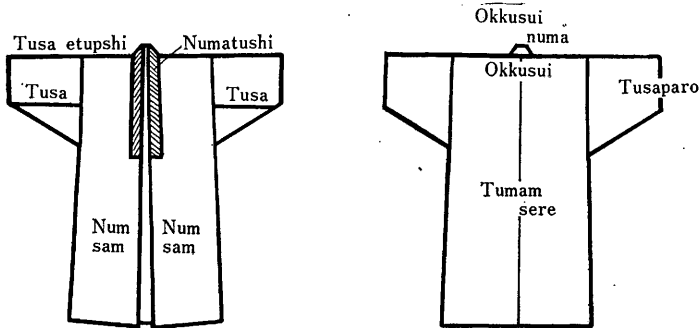


図2 各部の名称

各部の名称は図2に示すごとく  
 衿……ヌム・アッシ(ヌマツシ)  
 (mumatush)  
 袖……ツサ (tusa)  
 袖口……ツサパラ (tusaparo)  
 袖先……ツサエツプシ (ツサプ  
 イケ) (tusaetupshi)  
 裾の部分……チンキヒ  
 (chinkihi)

前身全体……ヌムサム (num sam) またはツサプイケ (tusapike) 脊中全体……ツマムセレ (tumamsere) 三つ衿の部分……オックスイヌマ (okkusuinuma) と呼んでいるが、身丈、裾、袖附、衿下などの名称はあったものが、あるいはなかったものか、文献によっても古老にたずねても明らかでない。

アイヌ芸術によれば二風谷村国松氏は 衿…ヌマツシ (numatushi) 前身ごろ…ヌムサマセレ (numsamasere) 後身ごろ…セツルセレ (seturusere) 脊縫…セツルイキリ (seturuikire) 脇縫…ツサボク (tusapoku) 胸襟…サシワ (sashiua) 肩巾…タプセレ (tapsere) と呼んだと記されているが、この名称は地方により人々によってその呼称の異なっているものが多い。

袖の形について

ツサ (tusa) にも次の三種類がある。筒袖形式、ムジリ袖形式、ヒロ袖形式 図3

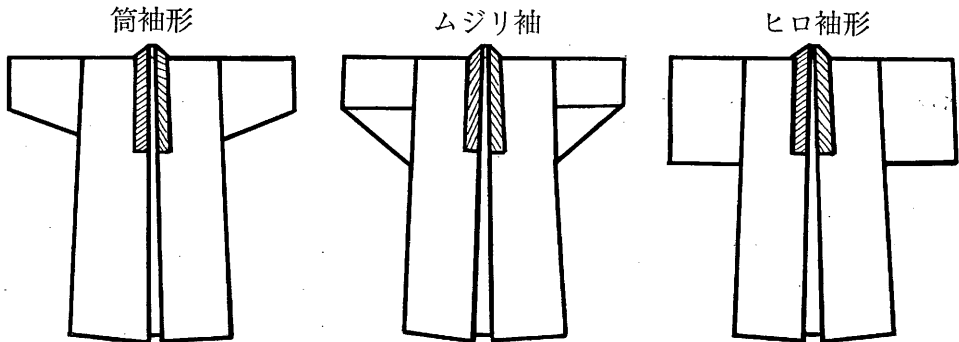


図3 袖の形のいろいろ

ヒロ袖形式のものは丈40~50cmで、筒袖形式のものはこの丈を袖口の方が短くなるように三角に縫い込んだだけの形のものを言い、ムジリ袖は図4のように布丈を袖口寸法に折り曲げ残りの丈を袖口のところから袖巾の方へ三角に折り曲げてこの突合された所を縫い合せて作る。柳田国男氏の「木綿以前のこと」には『トシャウカウカとあってこれは「ツサウカウカ」の意と考えられ、「ツサ」は袖「ウカウカ」は縫い合わすことを意味する。因に「ムジリ」は「むじりかど」のごとく曲ることより来ている』と記されている。更に古くは蝦夷生計図説の中にもこの「ムジリ袖」の作り方が「トシャウカウカの図」として詳しく示されており、また「北方文化研究報告第四児玉教授の

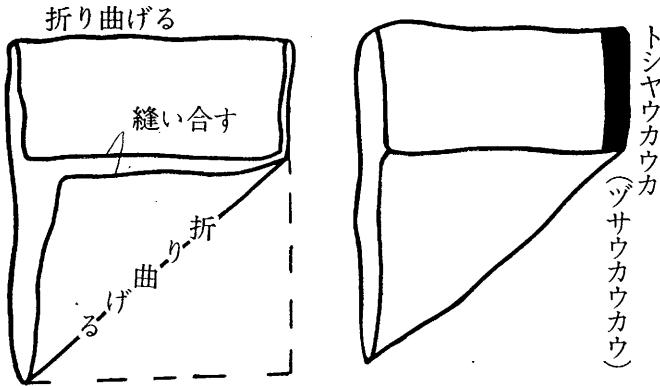


図4 ムジリ袖の折り方（蝦夷生計図説より）

「厚司」か「いらくき厚司」かが既にその頃用いられていた事は確実のようであり、こうしたことからこの「ムジリ形式」のものが遠い昔から作られていたことが考えられる。

この「ムジリ」とは東北地方では折り曲る意であり、アイヌでもこの袖を「チトサコノイエップ」（chi-tusa-konoyep）ねじり袖とも言はれている。内地のごとき四角形の袂袖を「サムツサ」和人袖と言う。土俗品より袖形を調査して見ると表1のようになる。

調 査 法	衣服名	文 献 に よ る も の		
		カバラミップ 又はチカラカラベ	カバラミップ 又はチカラカラベ	アツツシ
袖の種類	筒 袖	10	13	5
	ムジリ袖	51	94	15
	ヒロ袖	1	1	1
計		62	108	21

表 1

論文」に次の報告を見出している。『今から300年前に Dr. Angeris の報告した中に「衣服袖はダルマチカ程広くもなく又下は開いてもいない。むしろ稍狭く且つ体にくっついている。衣服の生地は、絹、木綿又は麻である。そして衣服がたとえ木綿若しくは麻であっても常に刺繍が施されている………」と』ダルマチカよりも狭い筒袖の木綿または麻様の着物すなわち

文献によるとアイヌ服62衣のうち「ムジリ袖」形式のもの51、筒袖形式のもの10、ヒロ袖形式のもの1とある。私共の調査では「カバラミップ」または「チカラカラベ」と「アツツシ」に分類して数えても、「ムジリ袖」は94、15という数を教えることが出

来、彼等の衣服のほとんどはこの「ムジリ袖」形式であったことが理解出来る。なおアイヌ衣服の袖には多種多様なつぎはぎ方法が見られ、布も様々なものが用いられているが全体が良い調和をしていて大へん美しいものがある。図5(1)(2)

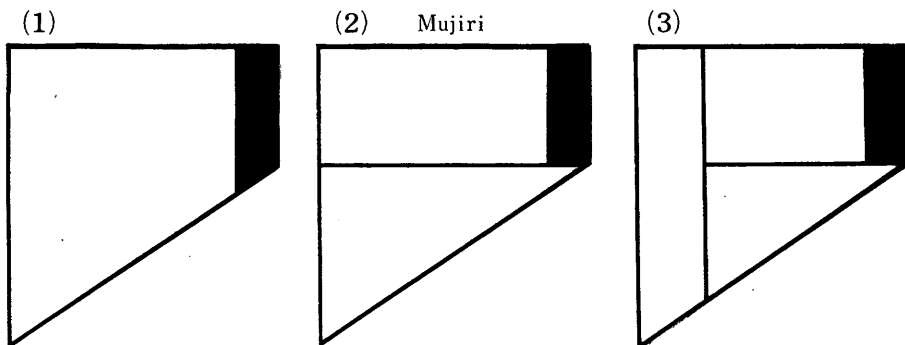


図5 袖のつぎはぎの図 (1)

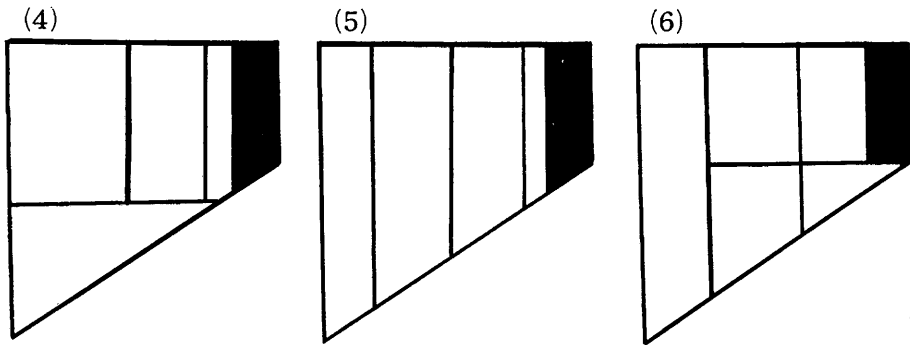


図5 袖のつぎはぎの図(2)

衿形について

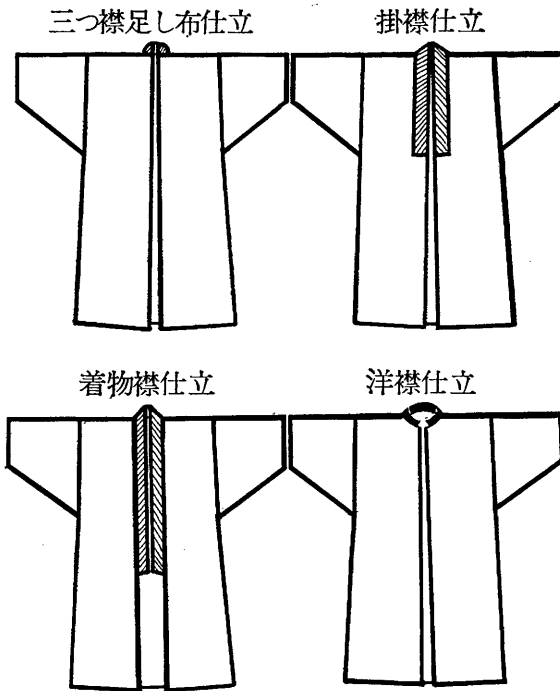


図6 四つの衿形

衿の種類	衣服名 カバラミップ 又はチカラカラベ	ア ッ ツ シ
着物形	3	0
掛衿形	2	0
三つ衿足し布形	99	16
洋衿形	3	3
その他	2	1
計	109	20

表 2

「ヌムアッシ」又は「ヌマヅシ」と呼ばれる衿についても、次の四つの形式がある。鷹部屋福平氏の論文によると『アイヌ衣の衿には黒い襟または縞の襟を出っ張らしてつけたものと、単にかぶせたものと、全然襟を他の布でかける事なく出来上りのままにしておくものがある……』と報告されているが、これは和服の着物衿仕立形式のものと、長襦袢に半衿をかけたような形、つまり掛衿仕立形式のものと、三つ衿の部分にだけ別布を補った形式のものと意味に解されるが私共の調査では樺太アイヌの衣服と思われるものの中に、いわゆる「チャイニーズ・カラー」形式のものも見出しているので四種となる。図6 これ等の衿はすべて身ごろ袖と共布で作られているのは少なく、全く別布をつけているのが普通の状態であり、心にくいまでに他の部分と調和しているものが多い。

調査した土俗品の衿形を分類すると表2のようになり、三つ衿足し布形のものが非常に多く、90%位の位置を示している。

従って衣服一枚に要する用布の量は身ごろと袖の分だけあれば事足りるということになる。

## 裁ち方及び積り方

65～100		110～130	
袖	袖	身	ごろ
		脊ぐり	
		身	
		ごろ	
		脊ぐり	

図7 アツシ裁ち方総合図

衣服一枚に必要な寸法を総合すると図7のような裁ち方総合図が考えられるが、袖丈や身丈などは次のようにして求めたようである。前報で記した算定法は織物のたて糸の長さの算定法であり、またそのまま身丈、袖丈の算定法にもなるわけであるが、蝦夷生計図説、アツシカル之部「アツトシウカウカの図」として『「アツトシウカウカ」と言えるは「ウカウカ」は縫うことをいいて、アツトシを縫うという事なり、是は前にもしるせるごとく着る人の形により、丈の長短はかねてよりはかり定めて織る事ゆえ、衣を縫わんとすれば先ずはじめに丈を定め置きたるところより切り、またそれを二つに切りてこれを身衣となし……云々。身衣をきりとりてその残りたる所にて図のごとくなる袖を造るなり、これを「トシヤウカウカ」と称す。「トシヤ」は袖「ウカウカ」は袖を縫うと言う事なり』と記されている。前報で記したごとく、私共の調査によると袖一枚に要する布丈を次のように算定することが出来る。

袖一枚に要する布丈（土俗品 採寸による）  
 筒袖………3～4指 45～60cm 位  
 ムジリ袖…4指+2節 65cm 位  
 ヒロ袖……（3指+2節）×2 100cm 位

身丈は長着として上に帯をしめる様に着る場合と、羽織の様に上からはおりかけて着る場合とは幾分丈の求め方に違いがあったかとも考えられるが、明確な資料を見出すことが出来なかった。

私共が実測した土俗品の寸法より換算すると凡そ図7に示された長さと考えることが出来る。衿肩明に相当するところを脊ぐりと呼んでいるが、真直に鉄を入れたものか、あるいは丸味をつけてくりこしたものか、はっきりしない。しかし蝦夷生計図説には『肩の左右を二寸五分程切りてその切りしところに木綿にても、アツシにても外のきれを入れて縫いつくるなり、そのかたちまづ衿ともいふべきが如し……』とあるので無難作にただ切り込みを入れただけのようなのである。

次に標付が行なわれたかどうかという点であるが、訪問した20数人の古老からは何等確答は得られず、また文献にも探し得なかった。前後の様子から推察して標付など行なわなかったものと思われる。

## 縫い方順序及び方法

縫い方順序についても文献には何等見出せず、古老に尋ねた例をまとめて記すこととする。

- 一 脊縫——脇縫——脊ぐり——袖附——衿附刺繍 芽室町K媼談（87才）
- 二 脊縫——脇縫——衿附——袖附——刺繍 二風谷村K媼談（74才）
- 三 脊縫——脇縫——脊ぐり——袖附——刺繍 鵜川町K媼談（66才）

先ず脊縫、脇縫をして後でいわゆる衿肩明を始末したように見受けられ、衿を先に始末する人も袖を作って袖を先につけて後で衿を始末する人もあったようで、その出来上りの形と共に種々様々である。

縫い糸については、第一報で報告したように時代によって変遷があり古くは鹿の脊すじ等を用いて糸としたように文献にあるが「オヒヨウ」の内皮繊維や「イラクサ」の繊維等を手燃りで糸となし、これ等を縫っていたことは古い土俗品から調査することが出来た。交易によって綿糸を移入出

来ようになってからは、綿糸の利用もまた盛んになったようで木綿衣の衣服には私共の昔使用した太い木綿糸が見出される。

針については第一報で報告のように古くは鹿等の動物の骨をうすく細くけずり穴を大きくあけて作ったものを使用していたようであるが、鉄製の針を交易によって入手出来るようになってからはこの針を非常に大切に扱い、部落でまわり持ちに使っていたようである。現在ある布団とじ針よりやや太目のもので貴重な土俗品として残っている。人の死よりも針の紛失をおそれ、悲しんだというエピソードを二風谷村K爺よりきいたことがあるが、その心情は充分理解出来る。

針の持ち方は針の形状の関係上掌に当てた「つかみ針」であり、二三の古老が次のように話してくれた。

- ・ボロでお皿をつくり、右薬指にかけて手のひらで針を持って縫った。(貫別町K媼88才談)
- ・「テカワ」と云う針当を中指または薬指にさし込み、掌にこの針当を持ち、針を持って縫うと縫いやすい。(音更町K媼85才談)
- ・皮で「テカワ」を作ってそれに針を当てて縫った。(二風谷村K媼談)



図8 てかわ

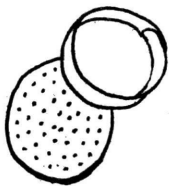


図9 針あて

これ等を総括すると、図8のような「てかわ」が考えられる。現在「つかみ針」用に使用している金属性の皿付針当 図9 があるが、このようなものも彼等の部落の中で見ることが出来た。これよりして現在もおこの地ではこうしたつかみ針の技術が行なわれているとみてよいのではなからうか。

縫い方 平取町K媼(74才)は縫い代は中指1節分であったと話してくれたが、多くの土俗品の調査によると、育縫、脇縫、袖附などはすべて0.3~0.4cmの

深さの巻縫または0.5cm位の平縫が施されているものが多く、中指1節の縫代では多すぎるのでこの表現は不可解なものの一つである。私共のよく用いる「ぐし縫」は刺繍の技法として使用されているが、縫い合せの技法として用いられていない事も注目の一つである。裾口、袖口、前身ごろ端等のいわゆる縫代の始末をする所には「イエチウス」(Ichinu)と呼んでいる「アップリケ」様の技法を施し、この当布で縫代を包み内衽になるように始末したり、あるいはまた0.5cm幅位に裏に折り曲げ無雑作に「巻き縫」がしてあり、沢山の土俗品の調査を行なって見て「くける」「まつる」という技法は殆んど使用されていない事に気づいた。これは大きさを目的としているためなのか、それとも知らなかったのか、また何等かの意味があるものなのか理解出来ない。

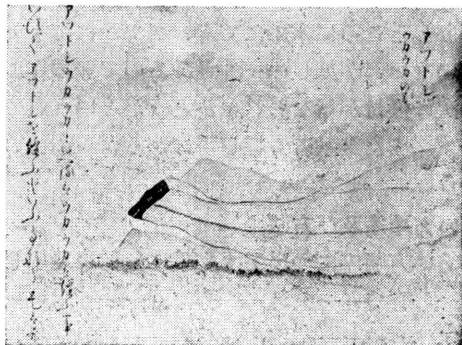


図10 アットシウカウカの図(蝦夷生計図説より)

糸の色など特に考慮されているものと考えられず、あるときはほどいた「ぬき糸」を使用したり、またこれ等を巧みにくみ合わせて太い糸でしっかり縫われていたり、如何にも彼等らしい素朴さと応揚さが感じられる。衿附は三つ衿の部分に補い布をつけた形式のものおよび掛衿仕立のものは共に表からかぶせて折山を「おさえ縫」がしてある程度である。図10

模様に対して、刺繍に対してあれ程の深い関心を持っている彼等にしてはこれまた驚くべき簡素さである。尺度がなかった頃、両手をひろげた長さ、指をひろげた長さ、あるいは手指の関節一節腕一つ分等が衣類の寸法を定めるためのものさしであったことは内地の山間隅地でも時折聞かれることであらう。交易により尺度が移入されてからは「一尺指」を用いたと鶴川町のH媼は話してくれた。

## 結 論

彼等特有の衣服がどのような形態をして、どのように構成されているか、土俗品の調査および現存する古老よりの事情聴取により記述してきた。内地の着物とあまり異ならないように見える形態も、細部にわたると非常に興味深く感じられる。身巾のせまい彼等の衣服は脇縫目辺りに別布の裂地をとじ合わせてあるものが多いが、これは前面がはだかるのをこれを防ぐための前巾へのゆとりであるかもしれない。そしてこれ等の裂地を巧にとり合わせているところに彼等なりの特長がある。男女の区別もほとんどなく、婦人達が「モウリ」を下着として着用しているのも身巾のせまい衣服故であろうか。こうして出来た衣服に彼等特有の刺繍が冬ごもりのうちに施こされたものであり、樺太方面の古服には裂地に支那鍛子が用いられ、仕立も長服であり、特殊な形をしているものがある。

内地の木綿衣が大量に彼等の手に入るようになり、厚司のような面倒なものより柔かくて、肌ざわりのよい着物が珍重され、特に小袖類、陣羽織など内地で不要となった古着類が交易によって酋長などの儀式用の晴着衣服として着用された。古い時代の彼等の衣服にはこれ等小袖の裂地が刺繍の一部に巧みにとりつけられているものがあり、その紋様の美しさと共に貴重な土俗品となっている。次回はこうして縫い上げられた衣服へ施される彼等特有の刺繍について記したいと思う。

終りにのぞみ本研究調査に対し御指導御協力下さった、北大名誉教授児玉作衛門先生御一家、東大鈴木尚先生、渡辺仁先生、北海道学芸大故河野広道先生、道立図書館更科源蔵先生、道立各博物館長先生、早大桜井清彦先生、東大梅原達治先生、北海道新聞社渡辺、辻山、葛西の諸氏、本学服飾美術科長官下孝雄先生、その他御協力いただいた多くの方々、アイヌ古老の方々および部落の方々に心から感謝申し上げます。（なおこの研究は本学旧職員藤原智恵子助教授との共同研究であり、本研究の一部は第16回日本家政学会総会に於て発表した）

## 参 考 図 書

- ・杉山寿栄男著：日本原始繊維工芸史 土俗篇 原始篇
- ・金田一京助・杉山寿栄男共著：アイヌ芸術
- ・鷹部屋福平著：北方文化研究報告 アイヌ服装紋様の研究
- ・名取武光著：ドルメン第三巻・第四巻 アイヌ土俗品解説（二）
- ・喜田貞吉著：ドルメン第四巻 アイヌは南方系か北方系か
- ・金田一京助著：ドルメン第一巻 アイヌのハヨクペ アイヌの黥
- ・渡辺 仁著：民族学研究第16巻 沙流アイヌに於ける天然資源の利用
- ・伊勢秦樟丸撰・常陸間宮倫宗増補：蝦夷生計図説
- ・民族工芸研究会：北海道原始文化聚英
- ・河野広道著：蝦夷往来第3号 アイヌ織物染色法
- ・知理真志保著：分類アイヌ語辞典 植物篇

東京家政大学研究紀要 第6集

- ・更科源蔵著： 北方文化シリーズ I
- ・河野広道著： 北方文化シリーズ II IV
- ・高倉信一郎著： 北辺開拓アイヌ
- ・英国王立人類学会保管： Dr. Manro 手記（渡辺 仁複聞による）
- ・Ling Loth： Studies in primitive looms
- ・Rev John Batchelor： The religion superstitions and general history of the hairy aborigines of Japan. The Ainu of Japan.
- ・Dr. John Batchelor： Ainu life and lore.
- ・George Montandon： La Civilisation Ainou et les cultures arctiques.
- ・R Torii： Etudes Archéologiques et Ethnologiques. Les Ainou des iles kouriles.